

前なる人よ立つ勿れ

後の者も見ゆるやう

勝負は誰も見たさなり

庭にうゑたる梅さくら 根方をふむな技折るな

花の兄なる梅の花 花の妹なる櫻花

咲きたる下にて手をひきて 皆諸共に遊ばなん

皆諸共に楽しまん

海邊の夕ぐれ いざり火

夕日落ち行く海の末 オレンジ匂ふくもの色

浪のうねく影うすし 沖よりおくるすゝ風を

軽き袂にはらませて をちこちあさる濱傳ひ

貝拾ふ子も今は去りて 汀の小さいわらふなみ

磯馴松の枝のうなり 調べおかしく聞ゆなり

潮路も見えぬ夕霧に 見えみ見はすみ薄くこく

海をわやどる島山を 見いる向ふの岩かげに

小舟掉さし父も子も うたう船うた勇ましく

浪のまにまに聞ゆなり うらの苦屋に只ひとり

我春我子の歸る路を 照さんどてか焚く松明も

海には家路急ぐ父と子 くがにはふなぢ思ふ母

かたみに寫す暮の色 打見るはま邊染なせり

日は暮れに見海は暮し 月は未だ出ぬ宵やみの

岩打つ浪も音すごく 吹き來る風の身にぞしむ

友に別るとて 東条子

今宵別れの思ひ出と 君がかなつるキオリンの

糸の調は絶ゆるども 名残はつきじとこしへに

月かげ 小林恒子

涙はらひてのる船の

けふりもくろき海の上に

かくれがちなる十六夜の

あはれ月のみさえわたる

故郷の友 同人

あられふる朝 雨のよる

鳥のなく音に 月かげに

うれしき事や うき節の

ま垣もなくて 語るべき

我がふる郷の 友三人

初秋の風 布士の舍主人

天の河さやかに見えてはしなくも

身にしみ渡る秋の初風

秋の山家

松風やましらの聲を友として

住む人いかに秋の山里

水 全 人

浪風の立たぬぞ御代の姿なる

臣に譬し水にしわりせば

山里の月 高木まつ子

妻戀ふる鹿のなく音に夢さめて

檜原の月をひとり見るかな

盆の月桐の葉越に澄めるかな 梟 睡

緇數尾芒にさして歸るかな 弦 月

鳴たつた沼の夕や月凄し 圓 侏

月天心街の踊盛なる 聽 濤

歸省して踊を見るや三年目 旭 子

蕎麥白き鳥や夕日赤蜻蛉 涼 月